

議事概要

※第 269 回長期評価部会（令和 6 年 3 月 19 日（火）開催）の議事概要より、以下の公表資料に関する部分を抜粋。

- 日本海側の海域活断層の長期評価―兵庫県北方沖～新潟県上越地方沖―（令和 6 年 8 月版）
- 日本海中部の海域活断層の長期評価（第一版）―近畿地域・北陸地域北方沖―

出席者

部会長	岡村 行信	国立研究開発法人産業技術総合研究所 地質調査総合センター活断層・火山研究部門名誉リサーチャー
委員	伊藤 弘志	海上保安庁海洋情報部技術・国際課海洋研究室上席研究官
	奥村 晃史	国立大学法人広島大学名誉教授
	佐竹 健治	国立大学法人東京大学地震研究所教授
	汐見 勝彦	国立研究開発法人防災科学技術研究所地震津波防災研究部門副部門長
	都司 嘉宣	四万十市地震・津波対策アドバイザー／国立研究開発法人建築研究所 国際地震工学センター特別客員研究員
	堤 浩之	同志社大学理工学部環境システム学科教授
	西村 卓也	国立大学法人京都大学防災研究所教授
	藤原 広行	国立研究開発法人防災科学技術研究所研究主監 マルチハザードリスク評価研究部門長兼務 先進防災技術連携研究センター長兼務
	山崎 晴雄	首都大学東京（現 東京都立大学）名誉教授
	矢来 博司	国土地理院地理地殻活動研究センター地理地殻活動総括研究官
	吉田 康宏	気象庁地磁気観測所長
専門家	岩城 麻子	国立研究開発法人防災科学技術研究所 マルチハザードリスク評価研究部門主任研究員
説明者	近藤 久雄	国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター 活断層・火山研究部門活断層評価研究グループ主任研究員
事務局	郷家 康德	文部科学省研究開発局地震・防災研究課長
	重野 伸昭	文部科学省研究開発局地震・防災研究課地震調査管理官
	佐藤 壮紀	文部科学省研究開発局地震・防災研究課地震調査研究企画官
	岩切 一宏	気象庁地震火山部地震火山技術・調査課調査官
	松尾 健一	国土地理院測地観測センター火山情報活用推進官
	上野、熊谷（文部科学省 研究開発局地震・防災研究課）	
	地震予知総合研究振興会※の担当者（以下「振興会」）	

※委託事業「地震調査研究推進本部の評価等支援事業」の受託者

—海域活断層評価手法等検討分科会の審議状況について—

事務局（熊谷）：（参考資料 1 に基づき説明）

岡村部会長：ただいまの報告について、ご質問やご意見等あればお願いします。

（意見なし）

—日本海南東部（仮称）の海域活断層の長期評価—

岡村部会長：日本海南東部（仮称）の海域活断層の長期評価について、事務局より説明いただく。

事務局（佐藤）：（参考資料 3-1～3-4 に基づき説明）

岡村部会長：海域活断層の現状と、今後の公表のイメージについて説明いただいた。ただいまの報告について、ご質問やご意見等があればお願いします。

都司委員：1729 年に、現在の輪島市の中心から約 15km 東の海岸線沿いで、かなり大きな被害を生じさせた地震が発生した。内陸側に活断層が見つからないため、おそらく付近にある海域活断層が活動した結果ではないかと考えている。陸に近い（沿岸域の）活断層について、最新活動を推定する手段は何かあるのか。また、公表時には、歴史上の地震に対応すると推定されるといった情報も公表されるのか。

事務局（佐藤）：最終的な評価文では、歴史地震についても議論をした上で載せていくことになると思う。ただ先立って、トレースや地震規模を公表することを優先させていただきたい。その一方で、今年の 1 月に発生した令和 6 年能登半島地震については、どの断層が動いたと書くことになると思う。歴史地震のように詳細な議論が必要な内容については一旦後回しにして、第 2 弾や第 3 弾の公表の際に議論をした上でまとめていく形になる。

都司委員：歴史地震カタログには、明らかに（海域活断層と）関係があると思われるものが見つかる。将来的な報告書の中で構わないが、是非、活字として残しておいてもらいたい。

事務局（佐藤）：承知した。

堤委員：参考資料 3-1 p. 17 に、「評価単位区間については今後審議予定」とある。陸域の活断層で単位区間を分ける時には、断層トレースの幾何学的形状と活動履歴の情報等も踏まえた上で認定している。海域ではおそらく活動履歴の情報はないと思うが、どのように単位区間を認定しているのか。陸域と認定方法が異なると思うため、その違いが分かるような書き方をした方が良いのではないのか。

事務局（佐藤）：海域では、トレースの形状を見ながら単位区間を決定している。

岡村部会長：活動区間については悩ましいところはあるが、やはりトレースを見て、近いところで同じ走向のものが連続する場合は基本的に 1 つの活動区間としている。走向が大きく変わるところや、逆断層型で傾斜の向きが変わるところは活動の境界としている。参考資料 3-3 のトレース図は、悩ましいところもあるが、概ね妥当な形になっていると考えている。

事務局（佐藤）：活動区間の認定方法については、評価文の断層の認定に関する箇所に説明を記載したいと考えている。

佐竹委員：参考資料 3-3 のトレース図に関して、東端はどこまでの範囲が入ることになるのか。日本海における大規模地震に関する調査検討会（2014）の報告書では、F42 まだがこの図に描かれている。参考資料 3-4 の特性表にある富山湾西縁断層帯や親不知沖断層は、日本海における大規模地震に関

する調査検討会（2014）の方では F41 や F45 に該当すると思うが、それがトレース図に描かれていないのは、（評価対象に）入れることが難しいという判断なのか。

事務局（佐藤）：参考資料 3-3 のトレース図は、海域活断層評価手法等検討分科会で既に評価を終えた断層を示した図である。今後の分科会で富山湾西縁断層帯等についても順次評価を進めていき、出来た範囲について、5～7月を目途に1回目の公表を行いたいと考えている。今回、お見せしているトレース図が最終的な範囲になる訳ではない。

佐竹委員：少なくとも、参考資料 3-4 の特性表に記載されているものは、公表される可能性があるということか。

事務局（佐藤）：そうである。

佐竹委員：了解した。タイミングを逃さないうちに、出来る限り早く公表していただければと思う。

岡村部会長：後2回の議論で、どこまで評価を進められるかどうかである。公表の方法についても未定の部分があるので、その辺りも含め、整理したい。

以 上